

リーダー教師の成長とコミュニティ：
教職大学院リーダーコース院生との1年間

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-04-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石井, 恭子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/3158

リーダー教師の成長とコミュニティ

～教職大学院リーダーコース院生との1年間～

石井 恭子

はじめに

福井大学大学院教職開発専攻には、平成20年4月に1期生34名が入学した。そのうち、19名はリーダーコース院生として、勤務校で通常どおり授業や生徒指導をしながらの大学院生生活を過ごしている。本稿では、その中の一人の院生に焦点をあて、教職大学院における学びと成長に立ち会ってきたスタッフとしてこの一年間をふりかえってみたい。

とりあげる院生は、あわら市金津中学校の中学校理科教師荒川誠教諭である。大学院に入学する前から、福井大学とは、SPP（サイエンスパートナーシップ事業）や理科教育ワークショップ研究会（代表：福井大学教育地域科学部伊佐公男教授）などを通じて研究・実践活動をしてきている。一方、教職大学院スタッフである著者は、教職大学院開設に先立ち、平成19年9月に福井大学教育地域科学部理数教育講座に着任した実務家教員である。こうした背景により、教職大学院院生と教員という関係とともに、理科教員と理数教育の大学教員としてのかかわりも同時に構築していったことも、本事例での特徴であるため、その二つの視点からふりかえることにする。

1. 入学までのあゆみ

(1) 理科教育ワークショップ研究会での活動

理科教育ワークショップ研究会（以下WS研究会）とは、福井大学理科教育の伊佐公男教授を主催者として平成11年度に発足した研究グループで、中学校の理科教員を中心にカリキュラム研究や授業公開に取り組んでいる。現在は、企業連携と小中高連携という2つの柱で研究しており、学会発表、講演会、企業見学など、意欲的な教師集団である。月に

一度福井大学で行う研究会には中心的なメンバー12, 3名が顔をそろえ、授業計画や学会発表計画、年に一度の報告書作成など精力的に活動している。会員は中学校教員が中心だが、小学校や高等学校の教員もおり、メーリングリストで情報を共有している。

平成19年度は、「エネルギー」(福大附属中)「地球と環境」(丸岡高校)など、小中高通じて多くの理科(企業連携や小中高連携)の授業を行ない、そのほとんどが公開されていた。これらの公開授業は、小中高の先生と一緒に参観することも多く、授業の記録や話し合いの記録もメーリングリストで研究会のメンバーに配信されていた。この時点で、すでに小中高の学校を超えた授業研究の場はできていたということである。

荒川さんも11月に「ナトリウム」の授業公開をした。授業後にはていねいな授業のふりかえりがメーリングリストに書き込まれた。そこに書かれていたのは、以下の5点にまとめられた反省と成果であった。

- ① 授業計画が甘かった・・・指導案を考える際、生徒の予想を幅広い角度から考えて、その後の展開を考えることの大切さを感じました。
 - ② 授業のねらいをはっきりし、ゲストティーチャーに伝えることが欠けていた・・・
 - ③ 生徒の活動を、考える活動を中心にした授業を組み立てる必要があった。一方通行の授業で生徒は全く生き生きとしていなかった。
 - ④ 実験・現象の必然性がなかった・・・なぜこんな実験をしないといけないかという動機付けについてはっきりと具体的な演出がないとどんな結果が出て生きてこない・・・いま話題だからといっても生徒にとっては関心がない・・・ここに科学的魅力をどう演出して、知的好奇心を高めるかが大切だと痛感した。
 - ⑤ 企業連携については、授業者と企業の方との役割分担をしっかりと詰めていないとだめなことが改めて浮き彫りになった・・・電気分解についての教材研究に手間がとられて、授業そのものに対する考え授業力が不足していた。ただ、中田先生とつながりができたので、今後も化学実験についていろいろとアドバイスをいただけることが成果・・・
- (2007年11月20日 メーリングリストより抜粋)

荒川さんのコメントに、「教材研究に手間がとられ」「生徒が考える活動を中心にした授業を組み立てる必要」とある。すでに荒川さんには、授業力や授業作り、子どもにとっての必然性、といった意識があったことが伺える。偶然、11月2日に行なわれた、灯明寺中学校での理科教育研究会の南部隆幸先生も授業後に同様のコメントをされていた。理科の先生の授業作りは、とにかく教材研究に熱中する。子どもたちが理解しやすいように何度も予備実験を重ね、よりインパクトのある現象を子どもたちに見せようと、教材作りや授業の流れをシミュレーションする。そのため、どうしてもその教材への思い入れが強くなり、生徒の思いや関心がそこまで達していなくてもせつかく検討した教材は使いたくなくなってしまふことが多いのである。こうした思いを率直に、しかも公の場で表現されたお二人の先生の姿に、共通する授業への熱い思いや真摯に学び続けようとする姿勢を感じた。

実は、授業者自身によってこれほど詳しく授業後のふりかえりが書かれたのを見たのは、荒川さんが初めてだった。授業後に自分の授業をふりかえり、言語化し、仲間に開く、ということがごく自然に行われている。メーリングリストでは、事務連絡の書き込みが多く、授業公開のあとには授業研究会の記録も配信されるが、ほとんどが記録としての位置づけ

である。この荒川さんの書き込みによって、触発されたメンバーから授業の感想や企業連携における考えや励ましが書き込まれた。

(2) 入学を決意するまで

はじめて荒川さんと顔を合わせたのは、平成19年12月1日、福井大学で行われた「理科教育フォーラム2007」である。このフォーラムは、上述のWS研究会が年に一度開催しているもので、今年度は、地球温暖化に関する講演と、学校と社会の連携についてのシンポジウムという2本立てで行なわれた。まだ研究会の先生方の顔も名まえも分からないままに会場を手伝っていると、ちょっとの時間の合間も惜しんで期末テストの採点をする中学校の先生が何人かおり、そのお一人が荒川さんだった。

シンポジストの1人として、始まったばかりの理科支援員制度（小学校高学年の授業を支援する人材への予算措置）に続き、中学校でも理科支援員のようなものが必要だと主張した。先ほどの採点でもわかるように、中学校の先生の多忙は驚くほどだ。平日も暗くなるまで部活。土曜日でも部活。生徒指導。中間、期末テスト、進路指導など、仕事は連日終わらない。そんな中でも授業を工夫し、生徒の学びを考えたいという熱い思いが伝わった。

ちょうど教職大学院の認可が下りた日でもあり、フォーラム終了後の反省会で同席した荒川さんに教職大学院に来てくださいね、と声をかけた。「福大の教職大学院は、学校を休まなくていいのですよ。大学の教員が先生たちの学校に行き一緒に研究するんです」などと少し説明したが、あまり関心を持ってくださっているようには見えなかった。

10日ほどたったころ、荒川さんから教職大学院について聞きたいという電話が入った。「仕事を続けながら大学院にいけると聞いたので考えてみたい」「今までいろいろやってきたことをきちんと研究としてまとめる力をつけたい。」という。「これまで実践してきたことをふりかえり、実践報告をまとめることは、教職大学院の大きな柱になっていますよ。まず12月15日の説明会に来てください」とお伝えしたが、結局来なかった。県との連携が本格的に決まり、願書提出の期日も迫っているので、説明会の資料と出願書類、念のために既存の大学院の願書、さらに手元にある過去の長期実践報告も同封して、取り急ぎ金津中学校に郵便で送り、説明会の状況などをメールでお知らせした。

すぐに返信のメールが届いた。

ワークショップ研究会で勉強した知識をもっと広げていきたいと考えているのです。3年前から企業連携の授業をしているのも、去年からSPPに参加しているのも、・・・どれもみんな中途半端で理論がなく、この機会に論文1つ書けるような勉強をすると、自分のやっていることに整理がつかない、と思ったからです。・・・

(2007年12月17日 メールより抜粋)

今考えてみると、荒川さん自身がかなり自己開示的であることが伺える。まだ1度しか

会ったことのない関係なのに、ここまで書いていることが驚きである。その後、連絡がないままに県の締切日が翌日に迫った12月20日、敦賀の帰り道に電話が鳴る。「やはり受けたいと思って。校長にも相談したのですが、受けられるでしょうか。」県との連携によって、今受験者がぞくぞくと集まってきているところだ。あわてて車の中から教職大学院スタッフの長谷川先生に電話。なんと、福井に戻ってくる頃には、長谷川先生と淵本先生が金津中の校長室に出向いて丁寧な説明をしてくださっていた。滑り込みセーフ。長谷川先生は、正式な手続きをとるように助言しつつも「荒川？高校の教え子だ」と一言おっしゃって、金津中学校に車をとばしていたのである。

教職大学院の認可から入学までのスケジュールは、超過密だった。特に県との連携については、理解を得るために大きな努力が必要だった。長谷川先生、淵本先生、上野先生という、県との信頼関係があるスタッフが何度も教育委員会や校長会などに足を運び、丁寧に説明し続けたことによる功績は大きい。県との協定ができると、今度は県教育委員会での面接や研究計画書の提出など、大学側には予測もつかない手続きが急ピッチで始まっていた。こうした状況の中で荒川さんは無事に出願することができた。

(3) 12月の集中講座

教職大学院では、リーダーコースのみ、1年履修が認められている。1年履修のためには、入学前に8単位取得済みであることが必須である。そのため、冬季休業中に6日間4単位の集中講座を履修する必要があった。2月の入学試験に向けて、まだ願書も出していないのに、12月の3日間で「実践記録・実践研究を読む」、1月の3日間で「実践の展開を跡付ける」という内容で集中講座が行なわれた。

12月の集中講座は、「何をするのか?」「何が起こるのか?」と不安と緊張の中でのスタートとなった。まず、教職大学院の目指すこと、高度専門職としての教師の実践的力を高めるためのカリキュラムについての説明。そしてこの3日間は、実践研究のあり方を学び、自身の実践を省察、共有し、発展させるために、まず実践記録を読むことに焦点をあてるという説明がなされた。多くの参加者が、よくわからないといった表情で、言われるままに小グループとなった。

現職教員である院生は、冬休みにも補習があったり面談があったりで、3日間フルには出られない人も多い。荒川さんも初日の午前中は参加できず、お昼からの参加。カリキュラムや集中講座の意味について個別に丁寧な説明を受けることができた。私も推薦した、附属中学校の竹澤宏保さんの修士論文を読むことにしたという。竹澤さんの修論は、教員としての小学校でのスタートから、ひとつひとつ実践を掘り起こし、どのようなことを考え、どのようなことをしてきたかが、ていねいに描かれている。そして、今勤務している附属中学校での「探究するコミュニティー」をテーマとする研究の中での理科の実践に、

これまでの実践や研究の経験が脈々とつながっていることが読み取れる。ときどき荒川さんの様子をうかがうと、夢中になって読んでいる姿があった。一日目の夕方、「明日は起きられないかもしれない」といって帰っていったのに、2日目は朝8時過ぎに来て、すでにパソコンに向かっていた。まずは、長期実践報告の中に没頭して、自分を重ね合わせているように感じた。

冬の集中講座 cycle 1 の初日のタイムテーブルは以下のようになっている。全体での活動は少なく、基本的には個人で進めていくが、3日間協働して研究を進める小グループごとに机を囲み、一日2回ずつ話し合う時間を設定している。特に初日の午前中は、自己紹介の時間をゆっくりとったり、1時間後に一度集まってお互いの関心を確認する時間をとったりするなど、初めての集中講座を安心してスタートできるように配慮している。

集中研究 Cycle2007-2008 Winter 要項 080104 版	
第1日	
9:00 はじめに	(全体)
<p>ごく手短な自己紹介① 集中研究の目的と構成、このサイクルの展開について確認します。</p>	
9:30 小グループの確認	(小グループ)
<p>自己紹介② (このサイクルで協働して研究を進めるメンバーです。取り組んでいること、課題としていることを紹介してください。)</p>	
9:50-10:40	(個別)
<p>実践記録・実践研究の選定層を定める</p> <p>最近の全国の学校の研究紀要を実際に手にとって、このサイクルで読み進めていく記録・研究を選択します。I群に関わって一つ、II群に関わって一つを選択します。 (この時間帯では一つに絞られなくてもかまいません。いくつかの候補まで絞ってください。) (手に取ってみて、探りながら、近くにいる大学の教員にもいろいろ相談してください。)</p>	
<p>I群 ①<実践の展開過程>を詳細に検討することのできる実践記録・事例研究 →p.6 ②学校改革実践研究コースの修士論文 →教職大学院の「長期実践研究」のモデル</p>	
<p>II群 ①自分の関心に即して検討しておきたい記録・研究 ②一群と比較対照する意味で特徴的な記録・研究</p>	
<p>一部しかない記録・研究については、選択したものについて付箋紙を貼って氏名を記入してください。 (複数ある『学校教育実践研究報告』の場合は、手元にとって自分の席で読み進めていただいかまいません。)</p>	
10:40-	(小グループ)
<p>小グループで選択した記録・論文、あるいはその候補を紹介し合います。 (選択した理由・自分の関心) その後、それぞれが自分のスペースを作って、じっくり記録・論文を読みます。 (一部しかない記録についてはコピーを取ってください。)</p>	

福井大学大学院学校改革実践研究コース

(個別)

<絞りきれしていない場合>

午後の時間帯にかけて、複数の実践記録・実践研究に目を通し、詳細に検討するものをI群で一つ、II群で一つ(か二つ)に絞ります。(絞り方について必要に応じて個別に相談します。)

16:00-

進め方についての確認をします。

記録検討のレポートの構成について。

(全体)

グループの中で、記録に即してどのように読み進め、検討していくかを確認する。

(小グループ)

報告のまとめかたについての打ち合わせ

17:00 を超えない時間に締めくくります。

第2日目

9:00- 進め方の確認 (51 演習室に集合します) 報告のまとめ方についての打ち合わせ②(全体)

9:20-13:30 実践記録・実践研究の検討レポートの作成(個人で進めます)

パソコン等をお持ちください。(大学にもノートパソコンがあります)

(食事はこの時間の間に各自で取ってください) (個別)

13:30— できたところまでを印刷します。(休息)

14:30- 実践記録の分析 グループでの中間的な検討 (小グループ)

①それぞれの報告の検討 その実践記録・研究の把握の仕方を確認する。

記録・研究の概要の把握と重要な焦点のより詳しい説明

②それぞれが持ち寄った複数の報告を聞きながら、比較検討しそれぞれの特色と相互の位置関係を探りあう。布置を整理する。マッピング

③②を括弧して、自分の取り上げている記録・研究の特長と位置づけ・評価を、報告の中に組み込む。またそうした視点から報告を再構成する。(3日めに向けて)

実践の展開を踏づける その方法・構造・組織と意味・意義

展開の意味と条件をさぐる 実践記録が書かれるプロセス その方法・組織とその意味

第3日目

9:00- 進め方の確認(全体)

9:20- 実践記録・実践研究の検討レポートの作成(個人で進めます)

記録・研究の検討 評価の部分をもとめ、レポートの全体をつくります。

(印刷)

実践記録・実践研究のデザイン・構成をめぐる事例研究としてまとめます。

14:00-16:00 グループを超えた総括的な報告と検討(クロスセッション)

この集中講座では、非常に印象深い出来事があった。校長に行けと言われて来たけれど、教職大学院は何をしてくれるのか？ 私はやるのがたくさんあるのに。という空気が蔓延としている中、「今日、やることの意味がわかりません。この講義のゴールは何ですか?! 何のために本を読まなくてはならないのか!」と詰め寄る1人の院生。大柄で声も大きく、

アカデミーホールに荒々しい声が響き、スタッフ全員が緊張する。ひるまずに「先生！これまでの考えを一度捨ててください。だまされたと思って、とにかく1つ選んで読んでください。」と真摯に伝える松田先生を仰ぎ見る一瞬だった。松田先生は、さまざまな紀要を読むことそのものに意味があるのだと説明した。じっくりと選び、じっくりと読む、そのことが大事なのだと懸命に説明した。それから約1時間ほど、実践記録をいくつかを手にとって読んでみてから、自分はどんなことに関心があり、どんな本を読むのかを同じメンバー5人で紹介し合った。リーダー院生の先生方は、堀川小学校の『生き方が育つ授業』や福井大学附属中学校の現職院生の修士論文など、自分の専門教科や関心に少しでもつながりのあるものを選んでいった。

午後には、それぞれが読み進んで感じたことや感想などを語り合った。「附属だからできるのではないかな？」「理想はわかるけど、実際にはそんな授業はできない」など、本音のつぶやきが出てきたところで、松田先生が問いかけた。「先生方は、本当はどちらなんですか？ 受験用の教育をやりたくてやっているのですか？それとも本当は受験用などやりたくないけどやっている？本当は探究的にやりたいけれどできないということ？」。一瞬凍りつき、「やりたくて受験用の授業などやっているわけありません」と答えるK先生。そこから、メンバーで理想を語り、現実を語り、本音で教育を語る関係ができたように思う。

集中の3日間は、同じテーブルに同じメンバーが座り、小さな静かな空間と時間を共有し、その小さなテーブルがいくつもあつた大きな部屋を全体で共有する。1日の中に、自分の課題に没頭する時間があり、それを小グループで聞きあう時間もある。はじめに「ゴールは」と詰め寄ったS先生は、3日目の朝、笑いながら「今朝校長が心配して電話してきた。つまらない講義を聞いていて気の毒だと。全然わかってない。楽しくて楽しくて仕方がない」といつてくれた。そんな第1回目の集中講座だった。

(4) 2月の授業研究会でふりかえりの大切さに気づく

WS研究会は、平成19年度に11回も公開授業をしており、小中高の先生が1つの授業を見合うという研究の土壌はすでに作られていた。しかし、2月28日に行なわれた藤島高校の化学の授業公開とその後の授業研究会は、新たな展開への起点となるできごとであった。この公開には、小学校、中学校、高校の教員、県教委、企業、さらに福井大学理数教育化学の中田隆二教授が大学院生を連れて参加され、多様なメンバーでの研究会となった。教科での研究会では、内容の議論に終始することが多い。一方小学校の先生は授業での子どもの姿を観察し、その事実をもとに子どもの学びを議論することが多くなっている。公開された1つの授業を小中高大の先生がどのように語るか、お互いの視点を経験し共有することができる理想的な機会であった。

授業は、黒板とチョークだけでなく、模型を使って具体的に操作するなど、非常に工夫されたものであった。予想通り、小学校の先生からは「高校では先生ばかりがしゃべって

いる。生徒の声が全く聞かれなかった。」と感想が語られた。また、エネルギーの出入りをどのように説明するかという議論では、「 $E=mc^2$ で説明している」という高校の先生に対して、中田先生から「結合エネルギーはクーロン力であり、電磁気力の相互作用。化学では $E=mc^2$ で説明しない」という指摘があった。さらに、県の指導主事からは、指導案にある記述に対して評価をどのようにしていくべきか、という意見も出され、授業研究会で多様な立場からの意見を聞く貴重な機会となった。

さらに、この授業後に、メーリングリスト上で授業を語り合うコミュニティが作られた。まず、荒川さんが口火を切り、研究会の中心メンバーである加藤校長から、参加した二人の先生の率直な感想が報告された。それを受けて、石井も授業内容へのコメントとともに小中高の教員がともに授業を見合い率直に話し合うことの良さを具体的に書き込んだ。

荒川「本日の授業に参加してきました。化学反応を粒子概念で理解させ、エネルギーの出入りを考えさせる内容でした。ワークシートに沿って学習が進み、いろいろな化学変化におけるエネルギー量をエネルギー図で考える作業は、エネルギーを量的につかませるには適していたかと思いました。ただ、橋場さんのご指摘通り、実社会との関連性の視点があってもよかったかなと感じました。たくさんの先生方の参観があり、また藤島高校の先生方の協力もありました。」

加藤「藤島高校の授業、うちの職員がお世話になりありがとうございました。」

『何か、大学受験直行便のような教育に驚きました。できる子はいいけれど、実験して直接現象にふれて「なるほど」、「どうして」というタイプの子は業の授業ですね。何か、簡単な分子模型をいじるだけでは、どうなのでしょう。ほとんど目を伏せている子が何人もいて、かわいそう…』

『先生なりに、一生懸命にされている様子がわかって、このような学校なら、我が子をぜひ入学させたいと思いました。内容のことはよくわかりません。でも、教科書外のことを積極的にやってくれているのはいいな、と思いました。』

やはり、現場の校長は、こういう異校種の学校に積極的に職員を送って、目を見開いてやらないといけないと感じました。実は、二人はとも理科とは縁遠いのですが、指導力の高い、児童・保護者の信望を集める優秀な教員です。いい機会を与えてくださった、WSの先生、授業者の先生、藤島高の校長先生に感謝します。」

石井「 485kJ など計算して生成熱や結合エネルギーなどを出しているときに、2桁3桁の単位としてkJであることに触れて1リットルの水の温度を1度上げるには 42J だと言えばよかったという指摘は、すごく重要だと思いました。……授業を見て、授業者の思いを伺い、授業を参観した感想や考えを話し合う「授業研究」は今、世界中で注目されている日本の優れたシステムです。特に、今日のように、高校でそれが行われ他校の先生、中学の先生、小学校の先生、化学専門の先生、企業の研究者、県庁の指導主事の先生がたがみんなで思ったことを話し合うということがとても貴重でこういう授業研究を続けていくことが大事だと思いました。授業を公開し、話し合いの場を設けてくださった先生、WSの先生方どうもありがとうございました。」

荒川「先生のコメントを読んでなるほどと、改めて考えをあらたにできました。この振り返りが大事なんですね。研究会も大事でしたが、研究会後の様々な先生のご意見を再検討することに意義があります。また加藤校長先生のご意見からも考えさせられました。参加された先生方がこの授業で受けた知識や考えを持ち帰って自分の授業

や生徒指導に生かしていく力こそが、「教師力」だと思いました。そんな意味で、こういった授業にどんどん参加していただくことがその教師にとって大事なことで、強制研修では得られない力がついていくのだと感じました。

……あらためて、実社会・実生活の結びつきを取り入れた授業について……考えさせられましたし、まだまだ勉強不足を感じましたし、昨日参加して良かったなあ勉強になったなあと感じました。加藤先生や石井先生のご意見で改めて、大学院にて、取り組む課題が少しだけ見えた感じがしました」

(2008年2月28日メーリングリストより抜粋)

限られた時間の研究会の続きが、その後のMLで続く形となった。化学反応やエネルギー変換をどのように教えるのか、といった内容に関する書き込みと並行して、加藤校長が、小学校の先生の率直な感想を書き込んだことにより、授業デザインについても議論することができた。その中で、荒川さんは「この振り返りが大事なんですね。・・」と述べている。2月28日の授業公開から、3月4日までに、6名が述べ12回の書き込みを行なっている。そして荒川さんが最後に、授業後の振り返りと公開の価値について述べて締めくくった。

荒川「いろいろな話で勉強になります。授業後のこんな話題があつてこそ、公開授業にした価値があると思いますし、できたら参加された先生方全員にも加わっていただけたらと思いました。思考実験……たしかに藤島の生徒には向いていたかなとも思います。しかし、現在の指導要領において「イオン」「陰極線と電子」など、粒子概念のほとんどを中学校にて勉強していないというか、科学現象を粒子概念で考える学習をしてこなかった生徒たちのほとんどが、総合理科で学問を終えてしまう(高校のカリキュラムのことはあまり分かっていないのですが……)

……こんな現実を考えると、科学離れが何かというものを痛切に感じます。またあの藤島の授業で思考実験がなされ、生徒が粒子概念を深められたかと考えると、わかりません。せっかく新指導要領では粒子分野と独立した配列になっているのですから、小中高の教員がどうこれを、学習活動に展開していくかを深く考えないといけません。」

(2008年3月4日メーリングリストより抜粋)

このメールの3日前には、ラウンドテーブルがあった。12月、1月の集中講座から始まり、2月の集中講座では学校改革実践研究コースの修士論文を聞き、3月のラウンドテーブルでは、伊那小学校や堀川小学校、始まったばかりの至民中学校の校内研究の取り組みについて詳しく聞いている。この3ヶ月間で、実践を聞いたり、読んだり、それについての考えを文章にしてレポートしたり、ということ積み重ねてきている。授業を公開し合い議論し合うということが、具体的なイメージとしてじわじわとつながり始めた重要な時期だったと思われる。

この時期、19名のリーダー院生は急速に仲良くなっていった。偶然高校の同級生だとわかったり、部活が一緒だったりということもあるが、それよりも、研究への思い、授業への思い、学校への思いを本音で語り合える先生たちのネットワークは急激に深まっているようだった。それを、荒川さんは以下のように振り返っている。

「事前に受けた冬季集中「実践記録を読み解く」では、何が書いてあるのかちんぷんかんぷんの状態でした。『探

究』『コミュニティ』『協働』『マネジメント』など単語は聞いて知っていましたが、実践記録の中に生きているその姿を理解することはできませんでした。情けなく、今後に対して不安になりました。でもそんな気持ちを和らげてくれたのが、同期入学の19名の先生方でした。集中講座の合間に学食でカレーを食べながら、「分からない。」と愚痴や弱音をこぼす時間が、大きな支えになっていました。」

(News Letter No.4 p.12より引用)

1年履修という制度によって、密度の濃い集中講座で経験を共有したリーダー院生は、その後も1カ月ごとの集中講座で出会うたびに親密さを増していった。「同僚性」という言葉があるが、リーダー院生の仲間関係に、強い「同僚性」という絆を感じる。職場が違って、専門教科を共有したり、課題や成果も共有したり、高めあったりする仲間として「同僚性」をはぐくんでいる。

2. 連携校における取り組み

(1) 拠点校とは違う

4月になり、いよいよ教職大学院が本格的にスタートした。金津中学校には、荒川さんと同時に水持直幸さんが院生となった。校長の高橋研一先生は、3月まで県教育委員会に勤務していた方で、教職大学院にリーダー院生を送るということに理解を示してくださっている。院生を通じて学校の活性化につながる取り組みを期待しつつも、部活や生徒指導など忙しい中学校の中で、まずは2人の院生を応援することを約束してくださった。院生が勤務する学校であっても、拠点校ではないため、いきなり学校全体を巻き込む展開とはならないことがわかった。

まず、校長、教頭、教務主任と一緒に、校内研究会のスケジュールを聞き、どのように関わっていけるかを話し合った。典型的な中学校であり、研究部の提案も、年に2回の指導主事訪問の日程と授業者を決めるという機械的なものだった。荒川、水持両院生が、指導主事訪問だけでなく、もっと日常的に授業公開のようにしたいと提案するが、自習にできるか?という問題にぶつかる。教頭が、「思い切って自習にしたらい。みんな自分の授業を見てもらって指導してもらいたいという気持ちはあると思う。月曜日は部活をなくして研究にしてもいい。大学の先生に授業を見て指導してほしいと言っている先生もいるし、お互いの授業を見たいというニーズはある。小学校ではもっと日常的にやっていた。中学でもやれるといい。」と話すのを聞き、荒川さんも「先生にそういうことを言ってもらえるとは思わなかった」と、校内に研究を提案することができると喜んでた。ただ、自習にしてまで授業研究をする、ということには、なかなか合意は得られなかった。

最終的に、「自習にしないようなシステムを作れば授業研究はできる。授業を見合いたいという先生は多い。5月の会議で研究体制について提案していこう。授業研究を今から計画に入れるのは無理かもしれないが、年に数回日を決めて、教科ごとに集まれるシステム

をつくれるといい。」という前向きな話し合いとなり、まず手始めに、1学期初めの教科部会が行われる日に、二人の院生が所属する理科部会と社会科部会に大学から柳澤・石井が2名参加してみよう、ということになった。

しかし、校内のリーダー的存在ではありながら、研究部に所属していない院生2人は、学校内の研究体制を動かすことはできなかった。5月に予定された教科部会は中止となり、学校の研究の中に教職大学院が加わるということではできなかった。荒川さんは、教科部会が中止となった日に大学に立ち寄り「結局何も提案できなかった。今年も年に2回の指導主事訪問だけで終わってしまう」とがっかりしていた。しかし、同じ理科の教員として教材研究については話が弾む。2月の授業研究会のことを話し合ったり、物理教室の香川先生が開発したマイクロビーズの実験を見に実験室を訪ねたり、さまざまな実験について話すことができた。そして、やれそうな授業からやってみましょうよ、先生が授業に取り組むときには必ず伺います、とエールを送った。

(2) 理科の授業における変容

荒川さんは、授業での子どもの仕草やつぶやきをキャッチすることに目覚めていった。集中講座などで、至民中や堀川小などの「子どもの事実を語る」授業研究の話を聞いたことや、藤島高校の授業研究会での小学校の先生のコメントにも刺激を受けている。さまざまな刺激を受け、荒川さんの中で、授業への取り組みが変わり始めた。これまでは聞き流していた生徒のつぶやきに耳を傾け、とらえることができるようになったと述べ始めている。子どもの言葉に耳を傾けるようになると、子どもの考えの道筋を考えるようになる。授業が変わってくるのである。このことを荒川さん自身は以下のように述べている。

授業中の生徒の仕草やつぶやきがおもしろいのである。その言葉の変化を追っていくことがおもしろいと感じるのである。大学院の石井恭子先生が、「中学校って、生徒が教師の話をしっかり聞いてノートをとってというのが当たり前になっているところない？でも小学校は先生が子どもの言葉をうまく拾って学習が進んでいくの。そこがおもしろい。」と話してくださいました。小学校の経験が無く中学校しか知らない私にとって、この話は黒船襲来(異文化)であった。また私が大学院にて勉強していなかったら、また教育書や実践集を読む量が不足していたら、石井先生の言葉もそのまま聞き流していただろう。生徒の授業中のつぶやきに気づき始めるといういろいろな発見があつておもしろい。

2年生「電流と抵抗」

2種類の電熱線(セメント抵抗:白い消しゴムみたいな抵抗 外見からは違いは区別できない)を使って回路を組み、それぞれの電圧と電流を測定しグラフ化することで流れにくさ(抵抗)に気づかせる展開である。今までは何のためらいもなく「それぞれの抵抗にかかる電圧を変え、流れる電流の量を記録してグラフ化しよう」という課題のもと、私は実験が安全に行われているかと、結果を記録しグラフ化ができているかだけに注意を払い、グラフができた生徒に合格マークを押していた。

実験中の机間巡視の最中。

幸奈「先生おかしい、実験がうまくいかない。この2つの電熱線は同じ電圧をかけているのに電流の値が違ってしまふ。」

健人「違う電熱線を使っているから当たり前」

幸奈「何が違うの？」 彼女には流れにくさ(抵抗)がイメージできにくいみたい。

教師「健人君、君の考える違っていて、もう少しみんながイメージできるような説明できないか？」健人はしばらく考え込む。

健人「電圧は水路の高さの差だから、水路のガサガサ感というか、水路に石があって水が流れにくくなって
いる感じ。」

幸奈「ならこの電熱線の中はどうなっているの、ガサガサの線が入っていたり？」

オームの法則の実験の最中に授業がストップしてしまったのははじめてである。私はこの後、セメント抵抗を金槌で壊して、中の細い線がたくさん巻いてあるものと、太い線が少なく巻いてあるのを確かめさせることにした。

1年生「根の作りとはたらき」

「一番長い根っこを探そう。引き抜いてもいいのは2つだけ。引き抜いたら必ず持って来て。」

根のつくりとはたらきを考える学習である。生徒達はめいめいに根っこを抜いてきて長さを調べている。

友伽「もじゃもじゃ根っこと真ん中ぶつとい根っこがあるよ」

信彦「もじゃもじゃ根っこは長い。真ん中ぶつとい根っこは長いのもあれば短いのもある。」

生徒達はいつの間にか不思議な名前を付け始めている。

「みんなどのようにして長い根っこの草を見つけたの？」

輪宙「僕、先生、もじゃもじゃ根っこと真ん中ぶつとい根っこの、茎と葉っぱの付き方の特徴発見したよ。」

愛洋「もじゃもじゃ根っこは、茎や葉っぱも柔らかいの。」

輪宙「もじゃもじゃ根っこは柔らかいから、茎が太いと倒れてしまう。」

信彦「真ん中ぶつとい根っこは長いと、茎も長い。短いと茎は短くて丈夫。」

愛洋「茎や葉っぱと根はそのしくみが決まっているみたい。」

1年生の生徒達は実におしゃべりである。前庭で取ってきた根っこを囲んで観察したことを発表しあう時でも、次から次へと発見したことや報告が続く。生徒たちの考えは、当てはまる植物の数は少ないものの、かなりの的を得たものだった。

輪宙君は、それまでは余目立たなかった。でもこの根っこの時間から私は彼を植物博士と呼ぶようにした。

……生徒が能動的に参加する授業、生徒のつづきやきをみんなで共有できる(コミュニケーション活動)授業、一人一人の思うことを自信を持って発表しあえる授業。そんな授業をやりたいという気持ちが、めきめきと強まっている。しかし、なかなかうまくいかないし、自信もない。授業の進度が遅くなるという問題もある。生徒主体の授業を全ての時間でやることは無理だとしても、それでもせめて、観察や実験ではじっくりと生徒の主体性を生かして進めたいと思う。

(2008年8月 Cycle3 レポートより原文のまま一部引用)

このころから、荒川さんの中で、求める授業のイメージが明確に作られていった。結果を正確に出す実験、そのための教材研究は確かに大事である。しかしそれだけではない、子どもの学びを中核に据えた授業づくりを目指すようになっていく。子どものどうして？ わかりたい、という探究心にとことん付き合っていく。子どものことばに敏感になることは、授業の本質にせまっていくことでもある。

(3) 授業改革ワークショップを立ち上げる

5月末に、水持、荒川の二人の院生の提案で、少人数の自主的な授業改革ワークショップを立ち上げるようになった。荒川さんが英語の先生に声をかけたのがきっかけとなっているという。4月の集中講座では附属中や教育研究所での取り組みを聞き、5月の集中講座では、至民中や他のリーダー院生の取り組みを聞き、徐々にエネルギーがわいてきたようでもあった。入学前にも、2月の学校改革修士論文報告会と3月のラウンドテーブルで先進校の取り組みを聞いているが、4月5月の報告は、教職大学院の同級生による現在進行形の取り組みである。自分の学校でどのように実践を進めていいのかわからない、という院生たちにとって、すでに新しい学校改革・授業改革を進めている仲間から具体的な取り組みの様子を聞き、大きな刺激と勇気をもらう機会であった。荒川さんは、この立ち上げについて以下のように述べている。

「初めはこんなことでも、みんながついてきてくれるだろうか？という不安があった。大学院で行われた5月のクロスセッションにて、至民中学校にて先進的な取り組みの企画・運営に取り組んで折られる牧田先生の話を知ることができた。「とにかくやってみること。どんどん自分が思うことを推し進めること。初めはいろいろな抵抗意見が出るが、反論しなくてもじっと聞くだけにする。反対する意見を全部出させてから(日を置いて)もう一度やろうと呼びかける…。こうやってやるとついてくる。でもある時ふっと振りかえると誰もいなかったり…。そうしたらまた修正してやってみる。」もちろん牧田先生の実際の行動は、もっと思慮深いものだったと思う。でも牧田先生ですら、とにかくやり始めてみるのが大事だと話しておられたことに、少し安心もした。同僚のS先生にも相談した。「私がいろいろと声かけるから」と言ってくれた。いろいろ悩んでも始まらないので、「とにかくやってみよう」という気持ちになった。校長先生に了解を得るために話をしたとき、「授業を大切にし、そのためにお互いを高め合う活動は大変に意義がある。学校の中堅として頑張りたい。」力強い承諾を頂いた。「こうやって教師が勉強するコミュニティーを作ることこそ、大学院の意図だろうし、こんな行動を期待していた。」船木教頭先生からも、教師の集団づくりの意義を認めていただいた。」

(2008年8月 Cycle3 レポートより引用)

4月に、応援する、とは言っていたものの、どうしたものかで見守っていただろう校長や教頭が背中を押してくれている。また、荒川さん自身も、それまでの集中講義やさまざまな話を聞いて、やってみたい、やってみようという思いがつのっていたことがわかる。さらに、同じ学校に水持さんという同期の院生がいることも、心強かったと語っている。ともに中核となる水持さん、S先生、理解者の校長や教頭、外部からの支援者である教職大学院の同期生や教員など、大きなパワーとなって荒川さんを推し進めていった。

以下のような案内を教員全員に配り、第一回目の5月29日には7名の教員が集まった。

「授業改革ワークショップ」その1

～今までの授業を振り返り問題点を話し合いながら、授業方法を再構築しよう～

日時 5月29日 木曜日 16時50分から(約1時間程度)

場所 会議室(空いていなければ 他の場所)

アドバイザー 柳沢昌一(福井大学教職大学院)教授

石井恭子(福井大学教職大学院)准教授

参加者 上記のテーマと一緒に勉強していただける人

内容 ・自分の今までの授業で感じている悩みや問題点

・授業の中でこれから取り組みたいと考えていること

・他の学校ではどんなことをしているのかなあ

・授業の見方・分析の仕方を知りたい

・実践したことを書き留め、今後活かしたい

など…の内容が考えられるが、今回はアンダーラインに絞って、各先生が抱えている悩みや問題点を共有しあう…

ワークショップ開催にあたり…(荒川)

(1)この春より大学院で勉強させていただいて、私自身が

①自分の授業を見直す必要性を感じた。またこれからの教職人生を考えて、新しい視点で授業を再構築してみたいと思った。

②大学のたくさんの先生とのネットワークが広がって、このネットワークを活かして、金津中学校の先生方と授業について話す機会を持ちたいと思った。

③学校のあり方が問われる時代になっている。新指導要領が公表され、これからの10年間でどういった形で「生きる力」を金津の子どもたちにつけていっていいのか、同じ学校で勤務する先生と話がしたいと思った。

(2)このようなワークショップを開きたいという気持ちを、某先生に相談したところ快く賛同していただいた。(気持ちを共有する重みをひしひしと感じた)

(3)忙しい勤務の中でこのようなコミュニティーの必要性を感じたし、そのためには、早い段階でとにかくワークショップを立ち上げたかった。

今後は、

・参加していただける先生方の都合に合わせて、開催日や時間を都合つけたい。

例えば、部活がない日に設定することも考えたい。また参加者の負担にならないようにしたい。時間も考慮したい。(夜の開催は嫌だから…)

(2008年8月 Cycle3 レポートより引用)

第1回は、部活を行う時間帯に行ったため、部活の副顧問の先生など英語や家庭科の若い女性教員ばかりの研究会となった。水持・柳澤グループと荒川・石井グループの2つで、6人ずつ小さな机を囲んで授業についての悩みを自由に話し合った。

グループ学習を取り入れたいが、私語ばかりになって収拾がつかなくなってしまったら不安、子どもたちが主体的に取り組む授業をしたいが不安だから全部教師主導で教え込んでしまう、など、率直な悩みがたくさん話された。まずは、教科も学年も教員としてのキャリアも違う同僚が自由に話し合える雰囲気を作れるかどうかかがカギだった。

少人数で、共感しながら、笑いも出て、和やかな雰囲気で1回目のワークショップを終えることができた。どちらのグループも、誰かが長々と講義口調で話したり、若手がベテランから指導されるという雰囲気を作らず、参加者が平等でお互いの言葉をしっかりと受

け止める関係を作ることができたように思う。このあと、荒川さんはワークショップをともにした同僚との関係が変化し始めたことを語っている。

一つは、悩みを打ち明けてくれた家庭科のI先生である。おそらくどこの学校でも一人しかいない家庭科教員がよく話しかけてくるようになったという。さらに、このI先生は、同じ院生の水持さんが仲立ちとなって、指導主事訪問の公開授業の日に、教職大学院の家庭科教員松田淑子先生に授業を見て指導してもらうことにつながった。院生を通して福井大学と金津中学校の距離が少しずつ近づいてきた。

もう一つは、英語科主任のS先生である。今年、金津中学校英語科は坂井地区の研究発表を控えていた。英語の先生たちとともに、授業改革を進めようとするS先生のエネルギーが荒川さんと水持さんを後押ししていることが感じられた。S先生との関係はその後も発展し、夏休みには授業改革ワークショップで英語のビデオカンファレンス授業研究会に取り組み、2学期には荒川さんとともに美浜中学校まで出かけて校内研に参加している。

一方で、荒川さん自身は、教科を超えて学ぶことの大きさを実感するようになったと語っている。そのことを、以下のように述べている。

(2)教科を超えて学ぶことは多い

今回いろいろな教科の先生との話の内容は、すごく中身が深い。例えば、文科省が求める「生きる力」は、結局すべての教科を串刺しにしたような理念で結ばれることでより本物になると思う。例えばコミュニケーション力は、英語科だけでつく力でもなく、英語科だけが必要としている力でもない。また違った教科に自分の教科の話をすると、いろんな先生から初歩的な質問が出る。……教科をこえと、分かっていてくれて当たり前と言うことが当たり前でないことがよく分かる。このことが生徒にも当てはまる。」

(2008年8月 Cycle3 レポートより抜粋)

第2回目のワークショップは、6月18日の指導主事訪問日の2日後、20日に行われた。柳澤・石井は、続けて金津中学校に行くことになったが、授業を見た直後で話し合いをしたため、具体的な子どもの姿や授業の取り組みを話し合うことができた。メンバーも前回とほぼ同じ顔ぶれの10名程度の参加だったので、ひとつのテーブルを囲んでの話し合いになった。教育実習生も参加していたことで、「私も中学生のとき、授業中声を出すのは恥ずかしかった」といった生徒としての思いを話してくれたり、「どうやったら生徒にしゃべらせられるのか？」など素朴な悩みを話し合ったりすることができた。また、荒川さんや水持さんも、自分が困ったことなども紹介し、後輩が先輩に教わる、というよりも、みんなとともに語り合う、という会になった。また、「○組は、○○君がいい感じで発言してくれる」「私の教科のときは・・」というように、具体的な生徒の名前をあげて話す場面もあり、お互いが同じ学級を担当し、生徒を共有しているからこそその共感を味わうことができた。

1学期の終盤を迎え、荒川さんはこの2か月を以下のように振り返っている。

「2か月がたち、何回かの集中講座を受け、かなりの数の実践記録を読んだり、自分の振り返りを書き留めたりする中で、大学院で学んでいることが何となく見えてきたように思います。もっと多くの実践記録を読みたいと意欲も高ま

っています。学校での授業も少し変わってきました。例えば、1年生での主根・側根とひげ根の学習の中で、「先生、もじゃもじゃ根っこと真ん中のぶっとい根っこの、茎と葉っぱの付き方の特徴を発見したよ。」というような、これまでは聞き流していた生徒のつぶやきに耳を傾け、とらえることができるようになりました。そして次の課題に進めています。さらに、先週、金津中学校に「授業改革ワークショップ」というものを立ち上げることができました。柳澤昌一先生、石井恭子先生にも参加いただいています。きっかけは、授業中の悩みをある先生に相談したことからでした。「若い先生も同じ悩みを持っているんやろうね。」という言葉に、『一緒に勉強しようか』と思いついたわけです。月1回のペースで、悩みを共有しお互いに向うできる場にしていきたいと考えています。このように、教職大学院に入学して、私の中でいろいろな変化が生まれつつあることを実感しています。県内の仲間が増えた(ネットワークの広がり)ことや、自分の授業を振り返ることができた(省察する機会)こと、そして同じ生徒を目の前にして話ができる組織(実践的コミュニティ)ができたことです。これからも人と機会を大切に、貪欲に学び続けたいと思います。」 (NewsLetterNo.4 p.12 より引用)

(4) 合同カンファレンスのリズムの中で

教職大学院のリーダーコースの院生は、学校にふつうに勤務しているため、月に一度の合同カンファレンスが重要なリズムとなっている。6月28日(土)、29日(日)は、ラウンドテーブルが開かれ、教員養成大学や他大学の現職院生など、学外の研究者や実践者たちに自分の実践を語り、聴き合うセッションが行われた。そこでは、週3日インターン生として拠点校に通っているストレートマスターの院生の取り組みや悩みを聞く機会があり、フレッシュな情熱を感じ、新たな視点での気づきがあったという。東京学芸大学の生涯教育講座の教員が、若いインターンにいろいろ尋ねながら思いや考えを引き出していく様子に、多くを学んだようであった。ちょうど、金津中で2回のワークショップを経験した直後でもあり、ファシリテーターとしての技量というものを勉強した、見通しを持った進言、相手のコミュニケーションを引き出せる話題提供ができるようになりたい、と感想を述べていた。荒川さんの場合、金津中学校は拠点校ではないためインターン生はいない。そのため、こうした合同カンファレンスや日常の勤務の中で若い世代の相談相手としてメンターをすることが、教職大学院リーダーコース院生の実習として位置づけられている。ラウンドテーブルでのインターン生の語りや他大学教員のファシリテーションを経験したことは、金津中学校内でのI先生との関わりや若い同僚とのかかわりの意味をもう一度振り返る機会ともなった。また、4、5月の取り組みを発表するために実践をまとめることで、実践記録を書くことの意義や難しさ、これから学校で取り組む方向が見えてきたという。

いよいよ9日間の夏の集中講座が近づいてきた。7月の集中講座では、8月の9日間を充実して過ごすためのガイダンスも行われた。荒川さんと水持さんは勤務とぶつかって参加できず、平日の午後に福井大学で、担当の柳澤・石井とともに小さなゼミを行うことにした。これまでの取り組みの状況を聞き、今後の見通しを話し合い、8月の集中の目玉であ

る「架橋理論を学ぶ」ことについて議論した。結局「コミュニティ・オブ・プラクティス」を読むことに決めた荒川さんに「早く買わないとね」と言うと、「いや、持っているんです。WS研究会の加藤先生にいただいた」と言う。実は、WS研究会の中核的なメンバーである加藤正弘先生は、元附属中学校の研究部長である。教職大学院に行くなら、と、プレゼントされたそうだ。考えてみたら、昨年12月のフォーラムで提案された理科教育WS研究会の「発意－計画－実践－一般化－振り返り」という探究的な理科授業のスパイラルは、附属中学校の「発意－構想－構築－遂行・表現－省察」という探究の学びのスパイラルとそっくりであった。そのどちらにも関わっていたのが、加藤先生だったのである。

8月の集中講座では、実践記録を読む、架橋理論を学ぶ、自分の実践を跡づける、という、3つのサイクルでそれぞれの取り組みが進められている。荒川さんはこの2つめのサイクルで「コミュニティ・オブ・プラクティス」をじっくりと読み、その理論を手掛かりに自分の実践を捉えなおすということに取り組んだ。レポートの冒頭に「金津中学校とそこにおける学年会や教科会・校務分掌とWSの関係などを理論的に整理したいことと、今後WSが成熟するための仕掛けを探りたい」「コーディネーターとしての知識を深め、またファシリテーターとしての技量を高めるため、本著で語られている企業経営と実践コミュニティ理論が実際の学校現場にどのように適用できるかという点について考察してみたい」と書いており、1学期に2回行ったワークショップの位置づけとこれからの取り組みへの展望を省察し、次の実践に生かそうという意欲的な研究の姿勢が感じられる。レポートでは、本に示されていた「実践コミュニティ育成の7原則」を実際に行っているワークショップの取り組みに照らし合わせて検討することによって、今後の展開についての明確なビジョンを持つことができた。

続いて、cycle 3において、1学期の取り組みを省察し、授業改革ワークショップの初めの勢いを実践コミュニティとして発展させるために、記録を残したり、外部への発信といった新たな提案をしていくことにつながった。この夏の集中も、本を読み、読み取ったこと考えたことを語り、聴き合い、話し合う3日間となる。自分の取り組みを計画・遂行し、それを振り返り、語り聴いてもらい、本を読み、考え、書く、ということのリズムによって、荒川さんの中で新たな展開を生み出すことになったのである。

3. 授業研究とコーディネートに目覚める

(1) 授業改革ワークショップの新たな展開

第3回のワークショップは、夏休み中の8月29日に行われた。3回目は、これまでのように、まずやってみよう、という開催から、さらに前進しようという取り組みだった。これに先がけて7月にメールが入っていた。「英語で、コミュニケーション型の授業ビデオはないですか？8月にみんなで授業を見合っ、授業研究会をやりたいのです」。これま

でのワークショップで、お互いの悩みを率直に言い合える関係はできたが、もう少し授業研究を深めるために実際の授業をみんなで見て話し合うことを経験したいというのである。そこで、附属中学校のコミュニケーションを中心とした授業のビデオをさっそく借りて届け、付箋紙を使って検討する授業研究会の手法を紹介した。

夏休み中に集中講座で理論づけや振り返りを行ったことにより、荒川さん水持さんの、ワークショップに対する考えが明確になり、活動の目的や流れがはっきりと示された。

当日は、

- ①生徒が主体的に活動する授業をめざして
- ②効果的なコミュニケーションをとり入れた授業をめざして

というワークショップの目的をみんなで再度確認した後、

「参加者全員で一つの授業ビデオを見て、生徒の学びをみとる方法を学ぶ。」ということに取り組んだ。授業ビデオを見ながら、気がついたことや気になったことなどをその時刻も書きとめて付箋紙に書き、それを出し合って議論をするという形を紹介し、実際にやってみることにしたのである。金津中以外からも英語の教員が数名参加し、全員で一つの授業ビデオを見た。そのあと、2グループそれぞれ5、6人で、自分たちのメモを手掛かりに、授業の流れや子どもの姿をどのように見取ったか、話し合った。

それぞれが、授業を見て、気がついた子どもの姿を付箋紙に書くことにより、話し合いの焦点を、子どもの学びに向けることになった。また、授業の同じ場面で、付箋紙がたくさん書かれたことによって、気になっている教師の関わりや授業デザインについても、具体的な事実をもとにした話し合いとなった。



今回は、ワークショップ参加後に自由記述で感想を書いてもらった。そこには、これまでしてきた、教師の指導法をみるという研究授業の枠から飛び出て、生徒を中心に授業を見ることの良さや、今日始めて経験したことで実感したことなど、参加者自身の率直なことばで語られ、それを記録に残すことができた。

荒川さんや水持さんも、大学院にていろいろな実践を聞き、文献を読んではいたものの、実際に1つの授業を見て話し合うという授業研究会は初めての経験だったという。この英語のビデオカンファレンスは、金津中の同僚とともに、荒川さん自身にとっても、生徒の姿から生徒の学びを読み取り、授業を検討するということの価値を感じる機会となった。

(2) 授業研究会での仲間への積極的な働きかけ

一方、理科教育 WS 研究会は今年度からクロスカリキュラムに取り組むことにしており、10月には実践が行われることになった。授業は、5年生の社会科「自動車産業」の単元の中で、「環境にやさしい自動車（燃料電池車）」について、実験を通してしくみを理解し、考えようというものである。近隣の中学校の理科の先生が実験のところだけゲストティーチャーとして授業に参加した。

授業公開を取りまとめる立場の荒川さんは、これまでになく、熱く小中高の参加をよびかけ、石井には、教職大学院の教員や院生、藤島高校の先生にも声をかけるよう要請してくるほどだった。さらに、授業者の先生に向けて、授業研究の意味について熱く語りつつ、指導案を書く負担、授業公開する負担について配慮したメッセージを送っている。2月の藤島高校での授業研究会以来、「これまでは、授業を公開するだけだったが、これからは授業後の研究会が大事なのだ」と言うようになっていた。

「以前にもメールしましたが、小中高連携の一つに、異校種の教員や教員以外の同志が集まって、授業を分析できることにあると思います。そのためにも、今回も多数の参観者があればと思っているのですが、とくに小学校ということで、中高の先生方と小学校ですから、いろいろな学年・教科の先生が参加していただけるようお誘いください。

多田先生授業ご苦労様です。さて、授業研究会をよりよいものにするために以下の点につきまして、早めにメールしていただくと、授業研究会の段取りができますのでお願いします。

①単元の目標とその指導過程、またこの授業の単元内での位置づけ。(具体的にはこの授業を実施するまでにどのような指導があって、授業後にどのような発展を考えているのか？)(カリキュラム全体の中での位置づけ)できるなら、指導書に書かれている計画・目標でなく、社会科と理科の連携する価値が現れている指導過程をお願いします。

②(小学校だからそんなに問題はないと思いますが…)社会科の授業に理科の視点(連携)を取り入れることの価値？ならびに、この連携授業を実施するまでのいきさつというか、社会科の授業だけ達成し得ない成果

③この授業でねらっている児童の学び(具体的に、どのような児童を、どのような活動で、どのようになって欲しいのか？)

④多田先生が、この授業を公開することで、参観者にどんな観点で授業を見とって欲しいのか。

⑤児童の学習活動(思考)をどのような形でチェックし、また記録として(これについては、絶対ではないのですが…)残す予定か。

できる範囲でいいのですから、早めに教えていただくと、授業研究会の様子が見えてくると思います。もちろん指導案も書かれるとは思いますが、学校内で規定がないでしたら、ワークショップの記録的意味の指導案でいいのですから、略案でいいかと思います。私も何回か授業を公開するときに、指導案を書くことが負担になっていました。ありがた

りの指導案より、上記の特に①②のように、ワークショップがデータとして欲しいことだけを文章化していただければ後は略案でいいと思います。」

(9月23日メールリストより引用)

当日の参観者は実にバラエティーに富み、長畝小の多くの先生のほか、近隣の社会科の先生、福井大学理科教育の伊佐公男教授、理科教育の院生、長期研修生であるフィリピンの中学校理科教員、教職大学院教員の淵本先生や長谷川先生、教職大学院の社会科院生、企業の深江さん、福井大学院生である啓新高校の家庭科教員坂本さん、さらに教職大学院H21年度入学予定の藤島高校地学の斉川さん、物理の山内さんも参加した。

この日の授業研究会のコーディネートは荒川さんが行った。授業前に「グループはどうしましょう」と、初めからグループでの授業研を計画していることがわかった。終わった直後に、話し合い会場で、メンバーを見て3グループ編成にし、自由に座ってもらいつつ、教科や校種がばらけてコーディネータ役がどのグループにも入るようにした。

グループごとに30分ほど話しあったあと、それぞれグループでの話題を紹介し合った。燃料電池車の普及と社会の問題、燃料電池とCO²排出の関係、環境問題と学校教育など、多様な話題についてそれぞれの立場からの意見がでて活発な議論となった。理科の教員コミュニティであるWS研究会と教職大学院が融合する研究会となった。

またこの授業では、子どもが、燃料電池のことを「わからない」というところから学習をスタートしていた。これまでWS研究会で理科教育をともに研究してきた仲間が、小学校でこうした授業づくりをしていたことに気づき、新たな発見ができた自分にも気づくことになった。子どもの問いを生かした授業づくりをしたいと考えるようになった今だからこそ気づいたということかもしれない。授業後すぐに以下のようなメールが届いた。

この年になって、いろいろなことを学べていることに充実感を感じています。また学びって、いろんな所にあって、いろんな人から学べて、その繋がりが広がっていくのをこのごろ感じています。「分からないって素直に表現できる」これって学びの基本でしょうね。またそれを集団として受け入れられる学級経営もさることながら、常に意識していないと出てこない言葉だったのかなと思います。私は小学校の勤務経験がありません。中学校の授業では…と比較しづらい部分があって難しいのですが、でも中学生だからこそ、自然や日常生活の中における科学の仕組みに疑問を持たせ、「わからない」と集団で表現させることから授業を作れたら、きっと生き生きとした学びが展開されるのでしょうか。結局、生徒の学びを引き出すのは、教師の仕掛けと、日頃からの、身のまわりに不思議さを感じる感性を育てることが大切なんですよ。ドリルでは決して培われない、またペーパーテストでは測定できにくい大切な生きる力なんですよ。

(10月7日メールより引用)

このころ、学びがいろいろなところにある、言い方を変えると、どこからでも学びとろうとする荒川さんの姿勢が顕著になってきた。さらに、自分の授業への取り組みも活発になっていった。

(3) 実践を重ね、ふりかえり、さらに視野を広げる

2学期には、荒川さん自身も授業公開をいくつか行った。10月21日には、企業連携に

よる「化学電池」の授業を田中化学研究所の技術者とともにやっている。この技術者とは2回目の連携授業で、信頼関係ができていたこともあり、授業づくりの段階から議論を重ね、教材研究を丁寧に行った。生徒の学びを中心にすえながらも、中学校の授業としての乾電池、化学エネルギーという学習内容の意味について実社会で生きる社会人とともに考えることができた経験は大きく、自分自身の教材観を揺さぶられることになった。

荒川さんは、一人ひとつずつ乾電池を分解し、科学エネルギー源としての電池のしくみや利便性に気付かせたいと思っていたのだが、技術者は、乾電池を作る際にも、石油などたくさんの燃料・エネルギーを使っているということこそ知る必要がある、と考えを述べたそうだ。そこで、乾電池を分解した後、エネルギーの流れについてこの技術者がゲストティーチャーとして講義する、という授業の流れになった。授業後の話し合いでは、ゲストティーチャーも交えてのWS研究会のメンバーつまり理科教員だけの研究会となり、具体的な教材や電池について深める場となった。

A教員：光やナトリウムの授業のように、インパクトがあった。その点電池は電気が見えない分地味になる。その辺をどうするか？電気エネルギー概念と電池という部分で、子どもが学ぶような学べるような授業、教材が子どもの学ぶ意欲につながる授業。これが課題。

ゲストティーチャー：電池は5感で感じるができない。

大学教員：亜鉛が腐食しているのは良かったのでは？「化学は地味な物」反応速度も遅いし、授業でどう教材化するかが大変。

荒川：途中で女子が「あの子の亜鉛はぼろぼろで私のはしっかりしている」とつぶやいていたが、あれがポイントだった。

A教員：教材研究をもっとやって、新しい電池と古い電池を準備すると良かったのでは？

企業H：はじめから、班の中にそのような新枯電池を準備しておいたらおもしろい。

A教員：亜鉛は化学変化の様子が分かるが、二酸化マンガンは見分けられないか？

ゲストティーチャー：反応前は二酸化マンガンだからオキシドールに反応する。反応後はオキシドールとの反応は弱くなる。…

(10月21日 研究会記録より一部引用)

このあとも、理科教員だけだからこその議論が続き、授業の内容から科学的な疑問、企業での技術開発の話など、どんどん深まっていった。教科を超えて子どもの学びを中心とした授業研究会で学ぶことも大きいですが、理科のメンバーだけで行う研究会では、こうした議論を通して教科の専門性を高める場となっている。

一方、金津中学校の授業研究ワークショップのメンバーも、この授業を参観していた。「企業の方が乾電池の黒い粉末が少ししめっていると説明があったときに、何人かの生徒が粉をこっそり触っていた。」という事実を伝えてくれたそうだ。教科を超えて気軽に授業について話し合える関係が、授業を見合うことにつながる、うれしいことだった。

教科を超えた教員同士で授業を見合うこと、教科内容について話し合うコミュニティとしてのWS研究会、その双方の意味を車の両輪のように実感する機会となった。

さらに、11月5日には、金津高校教諭との連携による生物「解剖」の授業を行った。こ

これは、福井大学理数教育講座の卒業研究とも連携しており、高校教諭と学生と3人で、事前に何度か打ち合わせをしながら授業づくりを行った。授業には、高校教諭のゲストティーチャー、学生のTA、さらに生物学教室の大山教授も参加した。授業後の話し合いでは、解剖の学習で見られた生徒の姿を中心に、教材の意味についても話し合うことができた。

ここでは、若い学生や高校の教員とともに授業づくりをした充実感と、若い学生からも多くのことを学ぶ実感を味わっている。

一緒に授業を企画する時間が持てたことはすごく為になりました。今まではどちらかというと、やっぱり上から目線で、若い人の意見は聞くことはあっても、心の最終的な部分で、受け入れられない部分があったのですが、大学院にて、いろいろな教科やいろいろな世代の方と話をすることで、いろんな見方考え方を知ることが結局自分の思考を深めることにつながるんだという経験をしたことが、私自身を大きく変えている気がします。今回、小和田さんと話をしながら教材研究できたことは、今後の理科教師としてのまた財産になっています。 (2008年10月30日メールより引用)

こうした、多様な人々との授業づくりや授業研究会を通して、荒川さんの理科教員としての視野が広がり、柔軟に何でも学ぼうという姿勢が強くなっていることを感じる。

11月7日には、拠点校である丸岡南中学校で公開授業が行われた。教職大学院では、他校の授業を参観したり、他校の授業研究会に参加して助言を述べたりすることも、リーダーコースの実習に位置づけられている。校務や授業で、なかなか平日には学校を空けられない多忙なリーダー院生たちであったが、拠点校の公開授業には大勢集まり、授業研究での活発な議論が交わされ始めていた。荒川さんは、丸岡南中学校の公開研究会に参加し、司会をする理科の先生から相談を受けて、小グループでの話し合いにしよう、と提案したそうである。その結果、理科部会は活発な話し合いを深めることができたという。

11月22日に行われた、WS研究会主催の理科教育フォーラムでは、荒川さんは授業研究グループのチーフとして、「教科横断型」授業の取り組みについて、10月の燃料電池の授業を中心に報告した。そこでは、教科横断型のメリットとして、最終的には理科の概念が深まるということも述べている。教科を超えた授業研究会で、社会科や家庭科などさまざまな視点からのコメントをもらうことは、理科の教員にとって新鮮であり、新たな視点を獲得することができる貴重な機会である。教科を超えた授業研究会の意味も実感している。しかし同時に、理科の仲間同士で、教材や授業内容について話し合い深めることも重要であり、しかも楽しい。この両輪がどちらも大事であり、荒川さんは、そのどちらも実践コミュニティとして意味づけている。

4. 教職大学院での学びを生かす

(1) 重層的な実践コミュニティの深まりの中で

入学以来、苦楽をともにしたリーダー院生同士は、深い同僚性で結ばれている。お互いの実践を知り合い、悩みを知り合うと、お互いに有用な情報を見つけると、積極的に伝え

あうようになってきた。荒川さんも、実践記録のまとめ方についての悩みを話した附属幼稚園の林さんから茨城大の幼稚園の紀要を紹介してもらったり、至民中の大橋さんに長岡市南中学校の図書を紹介してもらったりしている。また、合同カンファレンスでの話し合いや、ニュースターに掲載された他校の取り組みから、リーダー院生の仲間たちがどのようにして学校の中の研究体制を組み替えていったのか、どのようにして、授業研究の大切さを校内の同僚に伝えていったのか、他の院生の取り組みをもっと詳しく聞きたい、実際に見てみたいと思うようになっていった。

12月には、美浜中学校に出かけ、校内研に参加することになった。美浜中学校の知場先生は、同じ理科の教員であり、エネルギー教育の実践研究に取り組んでいる仲間でもある。合同カンファレンスのたびに、何度も話を聞くにつれて、行きたい、見てみたい、という気持ちがとうとう実現した。本来、教職大学院は、こうした院生相互の交流をもっと活性化させたいと思っていたが、大きなチラシや案内のある公開研には参加しやすくても、校内研に他校の教員が出向く、ということに学校の理解を得ることに困難を感じていた。ところが、知場先生が、ささっと「派遣申請」の文書を作ってくくださったのである。新たな動きであった。知場先生は、この経験をきっかけに、1月には、やはり理科の院生である川崎先生が始めた武生一中の第一回授業研究会に参加している。

さて、美浜中学校では、研究主任の知場先生を中心に、授業研究会を核とした校内研を進めるようになっていた。当日は、英語科主任のS先生とともに、授業を参観し、美浜中学校の教員に混じり、4、5名の小グループでの話し合いに参加した。お互いが公開し、見あった授業について活発に話し合い、外部からのゲストである二人を自然に受け入れて率直に話し合う開かれた教員集団に二人とも感銘をうけていた。授業研究会のあと、ちょうど取材に来ていた福井新聞の記者も含め、知場先生とともに、教科を超えて授業公開と授業研究をすることのよさについて語り合った。帰りの車の中では、美浜中で感じたこと、金津中学校での授業研究会の推進についてなど、S先生との話が尽きなかったという。

(2) これまでの取り組みと省察が、生徒指導の新たな展開を起こす

美浜中の4日後、メールが入った。

・・・やはり立場が重要なんです。知場先生が研究主任という立場でコミュニティーを作り上げたのなら、私は指導部長としてコミュニティーを作ることかなと思いました。……今までみたいに全体が向かい合っただけの話し合いは結局、トップダウンの印象があり、先生方全員に浸透することがないという視点から、教員を学年・教科・校務分掌を超えて、無秩序に4人グループを7つ作り、テーマを元に自由な話し合いをしてもらいました。また答えを出すのが目的でなく、(というか生徒指導に答えなんてない)みんなが本音で、若者もベテランも自由に意見を討論することに価値があるから自由に討論して欲しいという、願いをはじめに伝えました。結果はグッドです。みんな今までとは違って、生き生きと話し合いを進めていました。笑い声もありました。一つのスペースで全員がグループで話し合っただけで、最後にグループから報告してもらって自然と拍手が起

こって…。大事なのは、終わった後から「よかった」「こんな感じで生徒指導以外のことも話し合いたい」という声が聞こえてきたことです。

(2008年12月12日 メールより抜粋)

これまで、金津中学校では、なかなか授業公開や授業研究会の文化を作ることはできなかった。何度も提案しては挫折していた荒川さんだったが、発想の転換によって新たな展開が生まれた。生徒指導についての問題について、生徒指導主任である荒川さんのアイデアで実現した、4人グループで自由討論をする場「生徒指導コミュニケーション」である。荒川さんは、この生徒指導の問題の根底に、教師同士のコミュニケーション不足、特に教科の壁、年齢の壁があることに気づいた。そしてこれが、校内研究会と全く同じ構図であることに気づいたのである。生徒指導の会議も、口の字型にすわり、担当者だけが課題と今度の提案を述べるスタイルは校内研究会と同じである。一人ひとりの教員の意識は高まりにくく、自分のこととして考えることができにくい。この形式を先ず変えていかなければ教師の意識を変えたり高めたりすることは難しいのでは、と考えたという。これまで考えたり、聞いたりしてきたことが、生徒指導という場で生かされることになった。教科や学年を超え、年齢やキャリアを超えた教員同士、4人グループで、自由に話し合うことが実現できた。小グループで語り合うことの効果や楽しさを、多くの教員が味わい、理解が得られ始めた。

荒川さんは、来年度に向けて、さらに校内に新たな文化を広めようと模索している。生徒指導コミュニケーションは、これからも継続していこう。さらに、平成21年度には、福井県教育研究所主催の「初等中等教育奨励事業」に、子どものコミュニティーを育てる授業を目指し、授業研究中心の校内研究会を継続して教員のコミュニティーを育てようという研究助成の申請をしている。今後に向けて、新たな挑戦が始まっている。

おわりに

金津中学校における授業改革ワークショップ、生徒指導コミュニケーション。理科の授業における小中高連携、教科横断型の授業研究会。荒川さんのこの約1年半の成長は、さまざまなリズムの中で、多くの人とのかかわりの中で、そして何よりも、金津中学校という自分の職場での実践の中で育まれた。毎日、生徒に向き合い、教材研究をし、授業をする。校務もすべてこなす。福井大学の教職大学院は、無茶なことをしている、という人もいるかもしれない。大学院とは、校務を離れて専門性を深めるところだ、という人もいるかもしれない。でも、この1年間の教職大学院での取り組みが、ここで述べた荒川さんほか多くのリーダー院生たち、またその学校の変容を支えたことは間違いない。こうした院生たちのドラマに、ともに参加させていただいたことは、スタッフである自分自身の成長の道筋でもあり、充実感と誇りと感謝でいっぱいになる。この実践コミュニティは、今後も実践と省察を繰り返し、大きく成長し続けるサイクル、多くの人々との協働によって今後もさらに大きく発展し続けるだろう。

【参考文献】

竹澤宏保, 理科学習における探究活動の構成と科学的リテラシー, 福井大学大学院教育学研究科 学校改革実践研究報告 No.15, 2006

堀川小学校, 生き方が育つ授業, 明治図書, 1984

福井大学附属中学校, 中学校を創る, 東洋館出版社, 2004

ウェンガー他, コミュニティー・オブ・プラクティス, 翔泳社, 2002

理科教育ワークショップ研究会, 理科好きな福井の子供たちを育てる試み, 第IV期研究成果報告書, 2008

